

進行食道癌への放射線化学療法感受性とDNA修復遺伝子Rad51蛋白発現の意義

当研究は当消化器・総合外科において2001年から2008年までに食道癌を切除した方および食道癌に対する術前検査にて内視鏡的生検を行われた方を対象に研究させていただきます。

【はじめに】

Rad51はDNA相同組換え修復遺伝子として知られており、DNA損傷に対し修復する過程での重要な因子であることがわかっています。DNA相同組換え修復遺伝子とは、遺伝子が放射線など何かの因子により傷ついた際、損傷部位を元通りに修復してくれる遺伝子のことです。放射線治療は放射線によりDNA損傷を引き起こすことを利用しており、他にDNA架橋剤と呼ばれる抗癌剤も癌細胞中のDNA合成を阻害します。しかしRad51が発現することによってこれらの治療に対する抵抗性が懸念されており、これらの治療を行う前にRad51発現の程度を調べることで、治療効果を予測でき、研究が進むことで将来、食道癌の患者さんに有益な結果を得ることができる可能性があります(図1)。

【対象】

当九州大学消化器・総合外科(第二外科)において2001年1月1日から2008年12月31日までに切除された食道癌の症例を対象とします。対象者数は切除標本が200例、生検組織が100例です。

対象者となることを希望されない方は、下記連絡先までご連絡ください。

【研究内容】

食道癌切除標本あるいは生検組織を用いて、Rad51蛋白発現を同定する免疫組織化学染色を行い、これらの蛋白発現の程度を測定します。

この染色の結果と患者さんの背景を比較し、Rad51蛋白発現が果たして食道癌での放射線化学療法においてどのような影響を持つのか考察します。

【患者さんの個人情報の管理について】

個人情報漏洩を防ぐため、九州大学大学院医学研究院消化器・総合外科学分野においては、個人を特定できる情報を削除し、データのデジタル化、データファイルの暗号化などの厳格な対策を取り、第三者が個人情報を閲覧することができないようにしております。

また、本研究の実施過程及びその結果の公表(学会や論文等)の際には、患者さんを特定できる情報は一切含まれません。

【研究期間】

研究を行う期間:承認日から平成26年3月31日まで

【医学上の貢献】

この研究により食道癌におけるRad51発現と放射線化学療法の良好な効果および予後との関連が示唆されれば、新しい治療予測因子などが明らかとなり、医学上の貢献はあるものと考えます。

【研究機関・組織】

九州大学大学院 消化器・総合外科(第二外科)

教授 前原 喜彦(責任者)

九州大学病院消化管外科(2) 助教 佐伯 浩司

九州大学大学院 消化器・総合外科(第二外科)

大学院生 中ノ子 智徳

連絡先: 〒812-8582 福岡市東区馬出3-1-1

Tel 092-642-5466

担当: 中ノ子 智徳

図1. 食道癌の治療とRad51発現が及ぼす影響

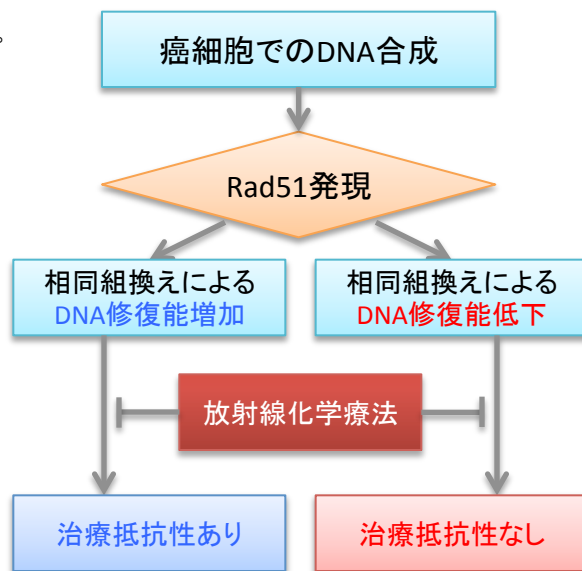


図2. 食道癌におけるRad51の免疫組織化学染色

